



取材中、入居者とのふれあうあまらず。『穂高悠生寮』の受容的な雰囲気心洗われるひと時。

用者さんに「最期はどこで死にたいですか？」っていう意向調査をしようとしたら、結構反発がありました。「そんなことを聞くのは失礼だ」「そんなことを聞くとパニックになる人がいる」って。でも、私は「利用者さんにも答える義務や権利があるのに、なぜ死を聞きたくないの？」って思うんです。

飯島▼「ご本人の意思を尊重しましょう」とは言っているものの、職員さんにとっては大変なことですね。みんなそれぞれに忙しくて、自分の時間が犠牲になるのを望まない。だから万が一には慌てて、とにかく「救急車！」とか「病院！」って。施設の現場からすると、専門を分けて役割分担した方が、職員が過重負担から解放されて良いのかもしれないけれど。

北澤▼病院以外の選択肢としては、高齢者施設と介護療養型医療施設があります。以前は、介護が必要になつてきた利用者さんには、言葉巧みに介護療養型医療施設に移ってもらっていました。介護療養型医療施設は、介護の面では十分にケアしてくれるけれど、それ以外は「今日はどう？」って世間話をするわけでもない。ただベッドに寝ていて、24時間の全人的なケアがあるとは言い切れません。そして高齢者施設。実はここはすごく敷居が高くて、知的障がい者は入居できる可能性が低いんです。

3000人くらい待機者がいる中で、少なくとも施設にいる人たちは生活の保障はされているから、在宅に比べて緊急度が低いんです。利用者さんが色んなケースのメリット・デメリットを踏まえて、ターミナルを自己選択できるようにすると良いんですが。

「マイナー」だからこそその発信

飯島▼こうやって障がい者施設のお話を聞いても、何となく思いを馳せることができるのは、やっぱり看護師の時代に在宅ケアをやっていたからだと思います。病棟の看護しか知らなかったら、多分生活の部分まで目がいかなかったと思うんですよ。「あとは行政や福祉の世界だよ」と言っていて見ない。在宅の場合はそれは出来ませんから。その点で、ここは本当に「頭の中に区別がない」というか、そのものをそのものとして見て対応して、「受け容れられる」って雰囲気がありますね。

こちらにお邪魔するまで、私は障がい者の施設に全く関わりがなかったので、「生老病死」の中に「障がい者の死」という部分があつたか、抜けていました。

北澤▼「領域としてマイナー」です。750万人と言われる高齢者群の中で、知的障がいのみならずは45〜60万人と言われています。

でも、いくら少ないと言っても人の価値は人それぞれに等しいはずですよ。

飯島▼社会からの周辺化、マイナーという点では、尼僧も似た境遇のところがあるかもしれません。でも、大勢がマイナーに気付かないことを責められないこともありませう。実家の尼寺や尼僧堂にいる間は「自分がマイナー」って気付かなかったんですけど、送行してから僧形で東京に行ったんですよ。そうしたら高田馬場駅で全然見えず知らずの人に、物珍しげに「良い頭の形しているな」って頭撫でられて、まだ20代だったんですけど、「何なんだ、これは」って。「自分は2年間も尼僧堂にいたんだ」「お坊さんなんだ」ってプライドがあつたと思うんですけど、それが頭を撫でられて「社会に出たら、尼僧の扱いはこんなものか」って思いました。尼僧の中にも先入観というか「前に出てはいけない」という不文律があります。でもマイナーだからこそ、積極的に発信して社会的認知度を獲得していく努力が必要ですよ。



北澤 克己

60歳。インタビュー当時(2010年2月)は『穂高悠生寮』施設長。障がい者のみなさんとの関わりをライフワークにしたいため、定年後は施設からより地域に近い場所で、関わりを持ち始めました。若いみなさんと汗と感謝の日々です。

社会福祉法人りんど信濃会 穂高悠生寮

長野県立の知的障がい者総合支援施設『西駒郷』の保護者らが中心となつて、比較的高齢な知的障がい者の居住施設として設置された県下6か所の悠生寮のうちの一つ。昭和58年に開設された。定員は男性25名、女性25名の計50名。

〒399-18305
長野県南安曇郡穂高町牧
電話 (0263) 83-4728
FAX (0263) 83-4727
URL <http://www.hotakayusei.jp/>